

日常のなかの名誉 -- トルコ・イスタンブルの事例から（分析レポート）

著者	村上 薫
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	247
ページ	49-55
発行年	2016-04
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00002979

日常のなかの名誉

―トルコ・イスタンブルの事例から―

村上 薫

中東における名誉というとき、真つ先に思い浮かぶのは、性的な不始末を犯した女性が夫や父、兄弟など親族に殺害される名誉殺人かもしれない。トルコでナームスと呼ばれる名誉もまた、マスメディアや国内外の人権団体、フェミニストによってしばしば名誉殺人との関連でとりあげられてきた。だが名誉はつねに陰惨な暴力事件に結びつくわけではなく、人びとの社会的アイデンティティや経済生活と密接に関わっている。さらに名誉の解釈は時代や階層によって多様でもある。本稿では最大都市イスタンブルの郊外に暮らす地方出身者の日常生活から、名誉殺人とは別の名誉の世界の断片を切り取ってみたい。

●トルコのナームス

トルコ語のナームス (namus)

は、狭義には親族の女性のセクシユアリティの保護／管理を通じて維持される個人や集団（家族・親族、村落共同体、民族など）の名誉をさす。ある女性のナームスは、彼女の家族や親族全体のナームスでもあることになる。これにたいし広義のナームスは、正直さ、人の道にかなっていることやそのことによって尊敬されること、自尊心などを含む。ナームスを守ることはしばしばイスラムの教えとして語られるが、その起源はイスラム以前にさかのぼる。ナームスに類似した概念は、地中海沿岸から中東、南アジアにかけての地域を中心に、広く観察される。

オスマン帝国の崩壊を経て一九二三年に成立したトルコ共和国では、イスラム的封建的社会秩序を打破するために女性の地位改革の必要性が唱えられ、女性はスカー

フをはずし、学校教育を受け、社会に進出することが奨励された。またスイス民法を模範とする世俗的民法の制定（一九二六年）を通じて、一夫多妻が禁止され、女性からの離婚の申し出が可能になるなど家族関係の近代化がはかられた。同じ年に制定された刑法が、二〇〇四年に改正されるまで、名誉殺人を減刑の対象とし続けたことに象徴されるように、国家はナームスの概念を支持し維持する役割も果たしてきた。だがトルコ社会においては、一連の改革を経て、ナームスは基本的には近代化になじみにくい、伝統的で宗教的な価値観として位置づけられてきたといえよう。

そのナームスは、一九九〇年代半ば以降、女性への暴力との関係で世論の注目を集めるようになる。きっかけは、高校や学生寮で素行

に問題があるとして病院で処女検査を受けるよう強要された女子高校生が、屈辱的な検査を拒否して自殺する、あるいは素行を疑われたことを家族の恥であるとして父親や兄弟の手で殺される事件が相次いだことにあった。その後、二〇〇〇年代に女性への暴力を人権問題とする認識が国際的に高まり、中東や南アジアの名誉殺人が注目を集めると、トルコでも名誉殺人が社会問題化した。だが、名誉殺人が国内外の人権団体やフェミニストから厳しく批判される一方、名誉殺人の背景にあるナームスの概念が正面から議論されることはほとんどないように思われる。

●日常のなかのナームス

筆者が二〇〇六年から調査を行ってきたS区は、トルコの最大都市イスタンブルのはずれに位置する。一九八〇年代終わりに全国各地からの急激な人口流入により成長し、市内でもっとも教育水準や所得水準が低く、選挙では常に親イスラム政党が勝利する宗教的に保守的な地域として知られる。二〇〇〇年の人口センサスによれば、二五歳以上の人口のうち小学校修了未満は、イスタンブル市全体で

一三・八%にたいしS区は二一・七%、六歳以上の女性の非識字率は、イスタンブール市全体で一〇・五%にたいしS区は二〇・〇%であった。男性は、日雇いの建設労働者や荷運び人夫などインフォーマルセクターの仕事に就くものが多い。

S区の人びとのあいだでは、女性結婚するまでは主に父親によって、結婚後は夫によってナームスを守られるべきだと考えられている。つまり、女性は結婚するまでは父親のナームスであり、結婚後は夫のナームスになる。父親や夫だけでなく、兄弟やおじ、従兄弟、結婚後は夫の親族や、女性親族もまた、彼女の行動に干渉する。女性は貞淑な女性として自ら行動を律するとともに、親族、とくに男性親族のいいつけを守り、従順に振る舞うことが求められる。

男性もまた、ナームスの秩序を守るため、さまざまな規則に沿って行動するよう求められる。彼らは親族女性の行動を監督するとともに、親族以外の女性とは距離を置かなければならない。他人の妻を凝視することは、彼女だけでなくその夫のナームスを傷つける行為であり、暴力沙汰に発展しかね

ない。子どもたちは、女の子であれば兄のいうことに口答えせず従うよう躾られ、男の子は姉や妹を守るよう躾られる。

テレビドラマなどの影響で若者を中心に恋愛結婚志向は強まっており、たとえ見合結婚でも親ではなく本人が結婚相手を決めるべきだという結婚観は親世代の間でも広く共有されている。とはいっても、娘に異性と交際することを許す親はまだ少数派のようである。女性は結婚前に性的関係をもつことを厳しく禁じられ、結婚後に夫以外の男性と性的関係をもつことも許されない。仮に関係をもった場合は、相手の男性よりも、女性の身持ちの悪さが厳しく責められる。

離婚のハードルは高い。これは夫や夫方の親族にとって、いったん自分たちのナームスとなった女性が離婚後であっても他の男性と性的な関係をもつことは、受け入れがたいという感覚があるからである。離婚した女性は、ふたたび実家の親族（父親や兄弟）のナームスとなり、彼らの監督下に置かれる。

寡婦は離死別を問わず実家に引き取られるか、独立した世帯で子

どもと暮らす。寡婦は性的な経験があり性的な欲求をもつために、男性につけいれられやすく性的に危うい存在とみられて、厳しく監視される。

S区の女性の日常生活は、ナームスを守るためにどのような服装をすべきか、誰と社交すべきか、どこまでなら女性一人で出かけるかなど、さまざまな規則や制限のもとおかれている。

家庭によって許容度はさまざまだが、ほぼ共通していることとして、親族以外の男性と二人きりになることは避けるべきとされる。女性の服装は、外出時には全身をすっぽり覆うコートを着用するものから、頭部だけスカーフで覆うもの、スカーフを着用しないものまで多様だが、スカーフを着用しない女性であっても肌が大きく露出する服装は避ける。

一般化は難しいが、結婚して子どもがいる女性が、バスに乗って親族を訪問したり病院や役所に出向くときは、夫や夫の両親（近くに住むか同じ建物に住むことが多い）などから許可を得るか、帰宅してから報告することが多いようである。近所の雑貨店や青空市場の買い物や、子どもの学校への毎

日の送迎には許可はもらえない。

女性の就労は制限されている。女性は家庭に在るべきだという日本でも馴染みのある性別分業の考え方がトルコでも根強いことに加え、働きに出れば親族以外の男性と接触せざるをえないからである。高学歴化（最近になって義務教育は高校まで延長された）と現金需要の増大とともに、近くの縫製工場などに働きに出る独身女性は増えている。だが結婚後は夫が働きに出ることを許可せず、家庭に入ることが多い。

およその傾向として、クルド系を多く含む東部出身者や、イスタンブールに移住してからの年数が浅いほど管理は厳しい。また独身の若い女性はもともと厳しい管理の



市の補助付きパンの売店に並ぶ女性たち

もとにおかれる。

実際には、規則がすべて守られているわけではなく、若い女性が親の目を盗んで恋人と会うことなどはよくあることである。だが、規則を破ったことが露見すれば、彼女は家族から制裁を受け、さらに厳しく行動を制限されたり、ときには暴力をふるわれる。S区では凶悪犯罪は少なく、名誉殺人はほとんど起きないといわれる。しかし少なからぬ女性は夫や父親、兄などから殴打など身体的暴力を日常的にふるわれており、それはしばしばナームスを理由とする。

ところで人びとの行動を律する価値としてこれほど重視されるナームスだが、日常会話でナームスという言葉が使われることはあまりない。たとえばある女性の振る舞いについて話すのにナームスという言葉を口にすれば、ナームスが問題になっていることになり、それだけで彼女のナームスは傷つきかねないからである。会話のなかでナームスを話題にするなら、具体的な名前を出すことは控えられる。ナームスが傷つくことが「(当該女性の) 名前が出る」と表現されることを示すように、ナームスは、不適当とされる振る舞い

に及んだ場合だけでなく、そうした振る舞いをしたと噂されるだけで傷つきかねない。

●女性の居場所と帰属

では、ナームスの保護を理由に日常生活で行動を制限されることを、女性自身はどのように受け止めているのだろうか。実はこれは人によっても、また場面によっても異なり、一様ではない。夫の嫉妬深さを窮屈だとこぼす女性もいれば、習慣化し束縛と感ぜない女性や、さらには次のインジのようにむしろ望ましいことと受け止める女性もいるからである。

インジ(仮名。以下で紹介する人の名前もすべて仮名)は二人の子どもと日雇い建設労働者の夫と暮らす三〇代(最初のインタビュー時の年齢)の女性である。まだ村にいたころ、夫と駆け落ちした。彼女は区の中心部にある病院(ミニバスで一〇分程度)など少し離れた場所に出かけるときは必ず夫に付き添ってもらう。これは夫が嫉妬するからというより、読み書きができないこともあって彼女自身が一人で出かけるのは怖いと感じ

じているからだ。夫は、イスタンブルの「もつと進んだ地区」でも働いた経験があるので、「自分は開明的で嫉妬などしない」というが、彼女にとって夫に嫉妬され行動を制限されることはむしろ好ましいことだった。

「嫉妬するのは、相手を守るということですよ。家族にたいして献身的ということですよ。嫉妬しないのは、たとえば戸口の外で通りがかりの人と話していても、何もいわないということ。焼きもち焼きなら、こういうことは受け入れられません。夫は、よそ者だけでなく、村の人とも私が話すのをいやがります。守るとするのはそういうことです。嫉妬しなければ、その家にはみんなやってきて、ほら、あそこの亭主は焼きもちを焼かないという。何をされてもいいのだ、関心をもたないのだ」と。彼女によれば、誇りある男性なら、家族に恥ずかしい思いをさせない。家族を守らない男性は無責任だ。女性は夫に守られるべきで、自由に生きるのはだめだという。

インジにとって、夫から嫉妬されて行動を制限されることは、妻として守られ大切にされている、自分は夫のものであるという実感につながっている。それに夫が嫉妬しなければ、親族や周りの人々から、夫からどうでもよいと思われる妻だと思われる、妻としての面目を失い、恥ずかしい思いをしなければならない。つまり彼女にとって嫉妬されることは、夫の妻であるという社会的アイデンティティに関わる。妻という社会的地位を確実にしたいのなら、「自由に生きるのはだめ」なのである。

ナームスの保護が社会的アイデンティティに関わるのは、夫婦のあいだに限らない。ある寡婦は、「ナームスは自分でも守れるが、誰かに守ってもらうほうがいい。夫方の親族からも父方の親族からも守られたい。そうすれば幸せ。守られている、氣遣われていると感じて、嬉しいから」と語った。

インジやこの寡婦の言葉は、セクシュアリティに干渉され、ナームスを守られることが、誰かに守られているという安心感や誰かの妻であり娘であるという帰属感に通じていることを示している。たしかに彼女たちのような女性ばかりでなく、あれこれいわれること

を抑圧としか感じられない女性も少なからずいる。だがそうした個人差を含みつつ、「ナームスを守る」とは、男性による女性にたいする支配を含んだ保護の関係といえるだろう。

●ナームスの経済

ナームスの保護には、経済的側面もある。

サビハ（三〇代女性）は、嫉妬深く怒りっぽい夫が、子どもたちに無関心なうえ、彼女が働きに出ることも許さず、国の貧困世帯支援制度の申請にも協力的でないことに腹を立てていた。「夫は階段清掃の仕事に行ってもいいかと聞いても反対します。腹が空いたからといって死ぬほどではないだろうと、何もなければマカロニ（安価な食事を指している）を食べればいいというのです」。

「夫は私たちを守っているとはいえませんが。精神的な（manevi）ことだけ気にして経済的な（maddi）ことを気にしないなら正常じゃない。精神的なことだけでなく経済的なことも同じくらい気にかけるべきで

す。お腹が空いているときに食べ物を持ってきてくれないのなら、私の存在は彼には関係ないということです」。

サビハが述べた「物心両面（maddi manevi）で守る」もまた、ナームスを守ることを言外に含んだ表現である。Maddiとは「物質的、物理的」、maneviはその対義語で「精神的、心理的」の意であり、「精神的に守る」（manevi korunak）は配慮や気遣い、励まし、ナームスを守るため慎重な深い行動を命じることなど、幅広い意味が含まれる。サビハはここでは、ナームスを守るために行動を制限するという意味で使っている。サビハにとって、妻子の扶養は夫の責任であり、夫がその責任を放棄しながら、彼女に嫉妬して働きに出さないのは、「正常ではない」。

サビハの語りの背景には、調査地に暮らす多くの女性は夫や親族に経済的に依存せざるを得ないという事情がある。失業の増加と雇用の不安定化により、夫ひとりの収入に依存する生活はますます困難になりつつある。そもそもイスタンブルのような都会では現金がなければ何も手に入らない。「村

では牛乳を飲んで、ヨーグルトを作っていた。村では青い野菜も肉もほしいと思わなかった。肉は月に一度だったし、果物を食べようとも思わなかった。お金を使わなかった。私たちは羊飼いだっただけで村でも貧乏だった。でも粉でパンをつくって食べていた。ここでは干からびたパンすら口に入らない。村でも貧しかったけれど、ここでは働くかそうでなければ飢える。お金を払わなければ何も手に入らない」（三〇代女性）のである。

そのためサビハのように、失業中の夫にかわって働きに出たい、あるいは副収入を得て家計を助けたいと考える妻は少なくない。だがサビハの夫に限らず、S区の男性は職場や通勤途中で親族以外の男性と接触することを嫌って、また一家の大黒柱としての面子を保つために、妻や娘が家の外に働きに出ることに反対しがちである。

経済的扶養とナームスの関係は、夫婦のあいだに限られない。

ひとり娘と暮らす四〇代の寡婦ヌライは、交通事故の後遺症で働くことができなくなり、親子は娘が得るわずかな収入と夫の遺族年金で生活している。「弟

はお金に困っていないか、と私に聞くことはありません。私からは彼にはいえません。私がいかに家賃の支払いに苦労しているか、年金でやりくりしているか、彼のほうで気づくべきなのに。私のほうからいえば、きょうだいである意味がありません。私はとても孤独です。弟が電話してくるときは、誰とつきあっているか、週末に誰と会ったかしか聞きません。弟は私を管理するけれど、私を（経済的に）支えてはくれないのです。こんな公正じゃありません。もし弟が私のナームスを気にするのなら、私を支えなければいけません。もし支えないなら、私に出かけるなどという権利はないのです。もし金持ちの男性から（経済的に）支えらるると申し出を受けたら、彼がたとえ結婚している男性であっても、私は拒否しないでしよう。だって弟は支えてくれないのですから」。

女性のセクシュアリティはつねに男性の脅威にさらされているという考えのもとでは、女性は夫や親族男性に経済的に依存せざるをえない。そこでは、女性のナーム

スを守ることは、彼女がほかの誰にも経済的に依存しなくてすむように保障することを意味する。仮に彼女が困窮して身内以外の男性を頼れば、彼女は見返りに性的関係を求められると考えるからである。ある女性のナームスを守るというとき、そこにはしばしば経済的な保護と支配、たとえば扶養することによる身体の保護、就労の制限を通じた労働力の支配なども含まれるのである。

●ナームスの新しい感覚

しかしこうしたナームスの考え方には、変化も起きている。以下では二組の夫婦の例を紹介しよう。

エズギ（三〇代）は、夫方の親族と同じ建物に三人の子どもと住んでいる。内装職人の夫は徴兵を逃れるために市中心部の繁華街に住んでおり、エズギたちへの送金は久しく途絶えている。夫はエズギたちが住む家を彼女に黙って抵当に入れて多額の借金をしたが、返済できなくなった。家を差し押さえられそうになったエズギは、夫の親族に支援を頼んだが断られてしまった。反発した彼女は、もう親族

のいうことはきかないという。最近パンタロンをはきはじめて、ことを義姉たちに注意されたが、「スカーフでは彼らに合わせているけれど、パンタロンをはくのは認めさせた。私が困っているときに経済的に (maddi) 守らないなら、精神的に (manevi) 私を守る権利はない」という。パンタロンは腰の形が出るため、保守的な人びとは女性が身に着けることを嫌がる。エズギは独身時代にスカーフをかぶっていたが、結婚後は夫方の親族に合わせてかぶりはじめた。しかしもう服装のことで文句をいわれてもいうことをきくつもりはないという。

夫方の親族から助けを得られなかったエズギはその後、夫の借金の返済と当座の生活費にあてるお金をもらうため、夫を訪ねることにした。筆者は彼女に同行したが、調査地の他の人びとは違って夫は、一見して外国人とわかる筆者に興味を示さず、なぜ妻と知り合ったのかとも尋ねなかった。夫と話をつけて別れたあと、彼女はがっかりした様子でこういった。「ほらね。彼は私が今晚どこに泊まる

のか、誰と会うのか全然気にしていなかったでしょう。もう少し嫉妬してくれたらいいのに」。

サビハがそうであったように、エズギにとっても経済的に支援せずにナームスにだけ干渉するのは不当なことだと思えた。だが彼女は、義理の姉たちの干渉は経済的な支援がないかぎり受け入れがたいのにたいし、夫の干渉は、彼が扶養責任をほとんど放棄しているにもかかわらず、むしろ歓迎している。夫には誰に会うのか、どこに泊まるのかと関心を持ってほしいし、嫉妬してほしい。エズギにとって夫の干渉や嫉妬は、夫が彼女を大事に思っていること、彼女を愛していることの証であった。

エズギはまだ一〇代のころ、近所に住む今の夫と恋仲になり、駆け落ちして結ばれた。夫による束縛を親族によるそれとは区別するエズギの感覚は、若い世代が恋愛結婚に憧れ、愛情で結ばれた夫婦が幅広い世代で理想化されるなかで生まれた新しい感覚といえるかもしれない。

●アイシエとメフメット

インジの夫の弟のメフメットは、

兄たちとイスタンブルに出稼ぎに来ていた。筆者が彼と出会ったのは、彼が里帰りした村でアイシエを見初め、イスタンブルに戻ったあとも彼女と電話で交際を重ね、婚約したところだった。

妻は家で夫に従うべきだというインジの話を横で聞いていたメフメットは、次のように語り出した。「女房がカフェに行けば、俺よりもっと顔のいい男をみつめて恋人になる。そんなことになれば、俺の手は血に染まるだろう」。

「俺たちにはナームスというものがある。金持ちは、女がほかの男と話せば恋愛しているという。新聞に誰と誰が恋愛関係とか書いてある、あれだ（タブロイド紙の芸能人のゴシップ記事を指している）。でも俺たち労働者や貧困層は、同じことをすれば売春しているという。俺たちは金持ちよりもナームスを大事にする。でもこれは教育を受けることで変化する。女の友達というものが可能になる。俺が党と関わっていなかったら、あんたと並んで歩いたりしなかった。俺たちにはそういう考えがあるんだ」。

メフメットはインタビュースせてもらえる女性を探していた筆者

を、一日かけて地域の知り合いに紹介して回ってくれたが、これは彼が当時、中道左派系の自由連帯党（ODP）の活動に関わり、男女は共に活動に参加し対等に議論すべきことを学んだから可能になったことで、そうでなければ親族以外の女性と——当時筆者は三〇代終わりで彼とは一〇歳以上離れていたのだが——並んで歩くことはありえなかったというのである。

その後二人は結婚し、インジタの家の二階で新生活を始めた。妻のアイシエは働きに出ることを望んだが、メフメットはこれを許可せず、家に居るよう言い渡した。以下はアイシエの言い分である。

「女性には都会になると服装が変わるし、話し方も変わります。モダンで時代にふさわしい服装をするようになるのです。でも私は（そばにいるメフメットを指して）この人のせいで変わることができません。ほかの人が私のことをみないようにと、服は彼が選びます。嫉妬するのです。私のことをムッラー（本来はイスラムの知識に通じた人への尊称だが、「狂信的」という意味で使っている）のように抑圧するのです。口では民主主義だとかいいますが、実はムッラ

ーなのですよ！ スカーフをとってお化粧したいのに。私は村ではもっとモダンに暮らしていました。村の人は無知だと思われているけれど、私は中学まで出たし」。

「村でもお洒落に興味があったし、身ぎれいにしていました。（なのに今は、といったげに）夫からプレゼントがほしい。今までもらったことがあります。食卓を整えてキャンドルを灯したい。ロマンチックにしたい。特別な日はお祝いしたいのです。結婚記念日とか誕生日とかヴァレンタインデーとか。私のことを好きといってほしいのに、それもいってくれなくて、『わかってないのか？』とかいうのです。家族についてのテレビ番組をみていると、こういうのはどこの家でも同じらしい。私たちだけではないようです。プレゼントを買ってほしいし、サプライズをしてほしい。女性なら誰だってそうしてほしいのに」。

だがメフメットは、夫婦の間で贈り物をするのは、「海沿い（ボスポラス海峡を見下ろす高級住宅地を指す）に住んでいる連中」だけだという。アイシエは息子の一歳の誕生日を祝いたいが、メフメットはそれも許さない。「そういう

うことに慣れさせないためだ。俺たちはそういうことはしない。イスタンブルに来てもしている人はいない。そういうことは西洋から伝わったことだ。村ではそういうことをする人はいない。ここに来てテレビをみて祝いたがるようになったのだ。俺たちが祝うのはバイラム（イスラムの祝日）だけだ」という。

●夫婦の温度差

以上のメフメットとアイシエのエピソードからは、ナームスや恋愛、結婚などにたいする夫婦や男女の温度差が伝わってくる。

アイシエにとって、都会の男性と結婚することは、狭い村社会から自由になり、スカーフをとり、お洒落をして出かけること、夫と二人のイベントを楽しむような生活を意味した。彼女にとって結婚は恋愛の帰結であり、したがって結婚はロマンチックなものでなければならなかった。彼女にとってナームスもおそらく愛情の問題であっただろう。

一方、メフメットは、家で食事をつくり夫を待つ妻を期待し、彼女に目をつけるかもしれない他の男たちに激しく嫉妬している。彼

にとつてナームスは、男としての体面により近い。結婚前の電話による交際は、妻子を守り従える夫、一家の主になるという現実的な目標に直結しており、恋人気分を楽しむようなものではなかったかもしれない。

二人の温度差の背景には、村出身の女性にとり都会の主婦が今でも強い憧れであることがある。村の女性にとつて都会で主婦になることは、重労働からの解放とともに、豊かな消費生活や社会階層的な上昇を意味する。そのような豊かさは、結婚記念日やヴァレンタインデーに贈り物をして祝うような、ロマンチックな夫婦関係を演出する豊かさでもある。

また都会で主婦になれば、姑など年長女性の支配からも解放される。インジ夫婦の家の二階で始めた新婚生活は結局、インジ夫婦をはじめ夫の親族からあれこれ干渉され窮屈なものになったが、彼女は村よりも自由な生活を期待していたであろう。

●「金持ちの恋愛、労働者の青春」

二人のエピソードからはまた、ナームスが階層的アイデンティテ

イと関係していることも伺える。メフメットは、金持ちなら恋愛というところでも、自分たちにとっては売春同然だ、自分たちは金持ちよりもナームスを大事にするという。メフメットがいう金持ちとは、海沿いの高級住宅地の住人をはじめとする人びとであり、夫婦で贈り物をしたり子ども誕生日を祝う習慣をもち、メフメットの目からみれば、いわば西洋かぶれである。彼らは男女の関係も自由で、西洋風である。一方、「俺たち」は、トルコやイスラムの伝統に忠実であり、バイラムを祝い、イスタンブルに來たからといって浮き足だったりはしない。メフメットは、ナームスについて語りながら、「連中とは違う俺たち」を正当化し、労働者、貧困者、あるいは村の人間という階層的アイデンティティを再生産しているのである。

もっとも、このように頑なに「西洋風」を忌み嫌うメフメットだが、ナームスの考え方は教育を受けることで変化すると語っていることに注意したい。彼は、左派系の政党活動を通じて民主主義や男女平等などの思想に触れたことで、親族ではない男女が友人や同志となりうることを学び、それまでの見

方が変わったと述べている。トルコ社会では、学校教育は近代性を象徴する。そうした教育——メフメットにとっては、左派の政党活動が学校であった——を受けることで、伝統的慣習に縛られない社交が可能だ、というのである。

●おわりに

「ナームスがない奴だ」。

S区で男性が相手をそう罵れば、暴力沙汰に発展しかねない。ミドルクラスの若者のあいだでは、今やこうした言葉は重みを失い、「他人の妻をみる」ことがナームスを傷つけるという感覚も失われている。だがS区の人びとのあいだでは今でもナームスは重い言葉である。ただし、ここまでみてきたように、S区でもナームスは暴力に結びつくだけではなく、さまざまな顔を持ち、変化も起きている。

変化のひとつは、経済的不安定が増すなか、S区の人びとにとって扶養を通じたナームスの保護のしくみが困難になりつつあることである。サビハとヌライのように、扶養されずに行動だけ制約されると嘆く女性も、今後ますます増えるかもしれない。もっとも、こうした状況で当惑しているのは、女

性以上に男性であるかもしれない。男性にとって妻子を養えないことは、ナームスの保護者としての面目を失うことであり、大きなストレスとなるからである。

また、ナームスを愛情の問題と捉えるような感覚も生まれている。ただし夫婦であっても必ずしも考え方は一致しない。夫による妻の行動への干渉を、妻は愛情の証と受け止め、夫は自身の体面を守るために必要なものと考ええることは珍しくない。メフメットがそうであったように、夫にとってナームスは、まだまだ愛情よりも世間体や面子の問題ということだろう。なお、エズギの夫は妻への関心を完全に失い、後に妻と離婚したが、彼のようなケースはむしろ稀である。妻のほうもナームスを愛情と関連づけがちなのは、年長者と男性が強い権威をもつ社会では、愛情で結ばれた夫婦関係は、若い男女、とりわけ女性にとって、そうした権威からの自由を与えてくれるからである。

(むらかみ かおる／アジア経済研究所 中東研究グループ)

《参考文献》

① Sirman, Nukhet "Kinship, Poli-

tics, and Love: Honour in Post-Colonial Contexts—The Case of Turkey," in Shahrzad Mojab and Nahla Abdoleds, *Violence in the Name of Honour: Theoretical and Political Challenges*, Istanbul: Istanbul Bilgi University Press, 2004.

② Üstündağ, Nazan "Toplumsal, Sıddet ve Kadınlik İlişkisi Üzerine Bir Deneme," *Amargi*, 4, 2007.

③ 村上 薫「トルコの都市貧困女性と結婚・扶養・愛情—ナームス(性的名誉)再考の手がかりとして」『アジア経済』第五四巻第三号、二〇一三年)。

④ 「イスタンブルの駆け落ち事情」『アジ研ワールド・トレンド』No.226、二〇一四年)。

⑤ 「トルコの名誉殺人」『アジ研ワールド・トレンド』No.233、二〇一五年)。

⑥ ヨナル・アイシエ「名誉の殺人——母、姉妹、娘を手にかけた男たち」安東建訳、朝日新聞出版、二〇一三年。